

第4章 ヒアリング調査から

1 協力者（県内地域連携教員 12名）

学 校	地域連携教員
宇都宮市立雀宮中学校	黒田 秀行 教諭 廣田 和之 教諭（平成26年度）
日光市立大沢中学校	神山 幸江 教諭
真岡市立物部小学校	高橋 美由紀 教諭
栃木市立都賀中学校	渡部 智裕 教諭
塩谷町立船生小学校	大田原 宣夫 教諭
那須塩原市立埼玉小学校	海老澤 康雄 教諭
佐野市立犬伏小学校	尾花 泰彦 教諭
栃木県立宇都宮南高等学校	針谷 英子 教諭
栃木県立宇都宮清陵高等学校	黒崎 照史 教諭
栃木県立烏山高等学校	藤井 啓太 教諭
栃木県立栃木特別支援学校	早乙女 陽一 教諭

2 調査のまとめ

以下に、上記12名の地域連携教員からヒアリング調査の際に得られた声を分類・整理してまとめた。「□」には「活動の実際」について、「○」には「活動の際の留意点や効果」について記載してある。

■校内計画の整備

- 新たな活動として地域連携活動を行うのではなく、今やっているもの、できるものをやるという方向性で取り組んでいる。
- 全体計画の中に「地域連携係」の役割を明記し、意識をもって取り組むことができるようにした。
- 計画作成の際、当初は校務分掌ごとに地域連携に関わる活動を洗い出して明示することも考えたが、束縛したり負担を感じたりすることを懸念し、詳細を記載することは取りやめた。
- 計画においては、常に洗い出しの意識をもっている。
 - ・ 重点的なものをピックアップ
 - ・ 「継続するもの」と「やめるもの」の分類整理
 - ・ 類似したものは統一して複数学年で実施（ただし「ねらい」の達成が可能か確認）
 - ・ 実施後の事業検証
- これまで、いろいろな地域連携活動がそれぞれの担当を窓口に行われてきたが、それら既に実施されていることを整理することが地域連携教員の役割だと考えている。
- 連携活動に関する情報を履歴として残す（例えば連携先の「代表者」「連絡先」「打合せ内容」「実際の様子」など）ことで、次年度以降の業務の効率化を図っている。
- 学年毎に作成した計画等の詳細を、係として一括してファイリングする。
- 学校全体で連携に関する活動を一覧にまとめ、それぞれの活動における窓口を、学校・地域について明確にしている。
- これまであった地域連携に関係する活動を、学年・教科・係（分掌）・行事・時期・内容など、それぞれの属性に分けて分類・整理した。
- 外部講師依頼一覧表の作成。（継続が決まっているものについて）
 - ・ ボランティアへの依頼時期が分かりやすい。
 - ・ 修正を加えつつ使用している。
- 今までのものを引き継ぎつつも「プラスワン」の気持ちは持つようにしている。

- 地域連携に関する業務について、学校全体を見通してまとめることで、全職員の共通理解の手助けになる。
- 連携をしていて、あまり効果のないものはやめる決断をすることが重要。
- 負担が大きくて児童生徒へのメリットが小さいもの、費用がかかるものは基本的には取り組まなくてよいと考えている。
- ある程度の役割分担は大切だが、それ以上に学校全体の地域連携に関する活動をまとめて整理することが重要であると思う。
- 一覧表を作成することで、活動が整理され、全職員で情報を共有することができる。
- いわゆる「人材バンク」を作成するのではなく、履歴としての情報を蓄積することが大切。
(連携先の代表者名・住所・連絡先・連携時の感想等)
- 教科や各種活動などに関連付けることで、組織として効率的に動くことができる。
- 各種計画の整理は将来的な負担減につながる。

■校内での共通理解

- 地域連携を取り上げた研修を実施し、無理に新たなものに取り組むのではなく、今やっている活動をできる範囲でよりよくなるように取り組んでいこうということを確認した。
- 外部講師を招いて「学校と地域の連携」をテーマにした研修を行った。本音を出し合い、有意義な時間となった。「めんどう」という本音と同時に「やってみたい」という意欲も出てきた。
- 地域についての理解を深めるワークショップを実施し、ふりかえりでは前向きなコメントが多数寄せられた。
- 地域教育協議会や地域コーディネーターなど、連携に関わる地域の方を職員全員が集まる場で紹介した。
- 職員会議資料に「地域との連携」項目を位置付け、毎月教職員への情報提供や啓発を行っている。
- 地域連携教員が職員会議において、「年間活動計画」の説明や手直し、ニーズ調査の依頼などを行い、職員間の共通理解を図るようにした。新任の職員には自校のコーディネーターとの連携のし方を丁寧に説明した。
- 計画書は必ず職員全員に配布するようにしている。
- 全校生徒に活動を知ってもらうために、校内の掲示板に写真を掲載した。
- 地域連携教員だよりの作成・地域連携活動関係掲示物コーナーの作成を行った。
- 職員室に大きく年間計画一覧表の掲示をした。
- 職員・生徒への周知のため、文化祭等の学校行事で活動紹介を行った。
 - 地域連携教育への理解が深まることによって、よさや効果を実感してもらえるようになり、職員の今後の取組への意欲が高まった。
 - 研修を機に地域連携の具体的なイメージが広がり、実際の活動に結び付いたものがあつた。きっかけ作りの重要性を感じた。
 - 研修での意見や提案を実現につなげる支援が今後必要になるかもしれない。
 - 全職員に関係者を知ってもらうことは、地域の方にとっても活動しやすい環境になる。

■管理職の理解

- 管理職へ事前に活動内容をある程度詳しく報告しておくことで、朝の打合せ等において話題提供をしてもらう。
- 管理職の指導の下、従来のシステムを踏襲しながらコーディネーターとの連携体制や教職員間の役割分担をしたことが大きい。
- 管理職の指導の下、地域と連携する基盤を築いてきたことが、前任の地域連携教員との引き継ぎを円滑にした。
- 関係者が来校した時には、管理職が常に顔を出してくれる。
 - 学校全体として打合せの時間を割いてもらえることは、管理職の理解によるところが大きい。
 - 管理職が地域連携の重要性について理解していると、的確な助言と十分な支援を受けることができる。
 - 関係者に対して、たった一言でも管理職が声をかけてくれるだけで、学校の印象がよくなり、連携がうまくいくことが多い。

■負担感の軽減

- 管理職を含め、チームで取り組む等に行っている。
- 「地域連携教育部」チームで分担して関わるようにしている。
 - ・計画・記録・報告書などの係分担
- 連携先との打合せは、できるだけ自分以外の関係教員にも同席してもらうようにしている。
- 地域連携教員の配置により、地域連携に関するすべての窓口になるのかという問題が生じたが、効率的・効果的に進めていくためには、これまでも地域と連携する活動に取り組んでいた係は、これまで同様その係が継続して窓口となって取り組むようにした。
- 活動を重ねていくうちに、少しずつ学年や担任が自立して動ける範囲を広げていく。
- 相手からの要望については、学校の現状を伝え、無理なものは無理と相手が納得できるよう丁寧に伝えている。
- 自治会長などの役員との関係づくり連絡・連携は校長、PTA 関係は教頭、地域住民やボランティア関係は地域連携教員という役割分担を行っている。
- 地域教材や地域人材の発掘、各学年への情報提供、各学年からの要請を関係者につなぐことを地域連携教員が行い、実施については担当学年に任せている。
- 自治会等の会議の際、学校の施設を積極的に貸与している。
- 外部との交渉には、できるだけメールを活用する。
- 授業中などの出迎えや連絡などは、事務職員や担任外の教員が率先して行っている。職員室の前黒板に予定が書かれており、それを見れば、関係者の来校がいつか分かるようになっている。
 - 職員の役割分担ができ、チームで動いていると、負担感を感じない。
 - 孤立は負担につながるが、チームで取り組めば、学校の組織力が向上する。
 - 地域連携教員は、全体のアドバイザー的な業務を行うこととしている。
 - 複数で打合せに参加することで、安心して役割分担をすることができる。打合せが複数回ある時などは、毎回主担当が参加しなくても引継ぎがしやすくなる。いろいろな教員に連携の過程を体験してもらうことができる。
 - 外部との連絡の手間を省くには、初めに顔を合わせておくことが大切。
 - 場所と時間の共有による効率化。
 - 過度な負担や責任を負わずに済む。
 - 任せるところは任せるという意識で。
 - 会議で話すより児童生徒からの発表を実際に見てもらう。

■地域との関わり

- 笑顔・挨拶・真摯な対応・感謝の気持ち。
- 地域と学校は対等の立場であることを心かけている。（尊重しつつも対等な関係づくり）
- 地域連携教員として地域の方とのふれあいを意識し、関係する行事や会議など、何かの時にちょっと「顔を出そう」「会話をしよう」「手助けをしよう」という心がけを忘れないようにしている。
- 地域のキーパーソン（地域のことをよく知っている人）や関係団体とのコミュニケーション。
- 地域活動における引率のときは、その場にいるいろいろな人に話しかけるようにしている。
- 「地域連携教員」の存在については、まだまだ十分に知られていない状況である。機会のあるごとに「地域連携教員の〇〇です。」と言うことで、少しでも知ってもらえるようにし、まずはお互いに顔のわかる関係を築いている。
- 「〇〇学校 地域連携教員」という文字の入った名刺を作成した。
- 「地域の中の学校」を目指すために、まずは学校を知ってもらい、学校に来てもらうことを念頭に活動している。「学校に行ってみようかな」と思ってもらえるようなアプローチをする。
- 様々な場面で学校の地域連携に関する活動の情報や児童生徒のよさを積極的に伝えている。
 - ・地域連携コーナーの設置
 - ・HPでのPRによる広報。
 - ・自治会の回覧板
 - ・来校した保護者や高齢者
- 色々な場面で、学校には「地域連携教員がいる」ということを伝えている。
- 学校に対してある種の先入観のようなものを持っている人には、特に気を遣って対応している。
- 登下校の見回りは、児童生徒の安全確保とともに、地域の方とあいさつをしたり顔を合わせたりする絶好の機会と考えている。
- 通学路クリーン活動を個人的な活動として行っている。
 - 地域も学校も共に気を遣い過ぎずに活動できることが望ましいと考えている。

- たった一言でも、声をかけるだけでも効果は大きい。
- 積極的に自分から動いて情報を収集することが大切。
- 学校の先生が来たというだけで地域の人は喜んでくれる。
- 地域活動に関わる人は、だいたい複数のものに関わっているため、別の時に「あの時の○○先生だね。」となり、ネットワークが広がり、その後の連携がうまくいく。
- 「相手の顔を覚える」「自分の顔を覚えてもらう」ことが大切。いざ何かをしようとするときに円滑に事が運ぶ。
- 名刺作成は、簡単で単純かもしれないが、持っていれば意外に役に立つことが多い。
- 積極的な情報の発信。単純ではあるが、続けることに意味がある。
- 保護者や地域住民から学校への些細な協力や関心も、連携活動への第一歩。小さなことからの積み重ねが信頼へつながると考えている。
- 相手の話をよく聞くことを、相手の人柄を理解し、信頼関係を築く一歩としている。

■連携する時は

- 依頼のあった段階で、「何をしたいのか、ねらいは何か、活動内容はどんなものか」を具体的にした上でコーディネート始める。
- 「体験あって学びなし」「地域や保護者との交流がゴール」とならないよう、活動の目的を把握した上で、相手との打合せを行っている。
- 教員ということあまり意識せず、人間として1対1の付き合いを心がけている。
 - ・できないことを隠さない
 - ・素直に助けてほしい気持ちを表す
 - ・学校のありのままを伝える
 - ・甘えることも大切
- 相手もその道のプロであるから、尊敬する気持ちを忘れずに、「アドバイスしてもらいたい」「教えていただきたい」という姿勢を忘れずにいる。また、相手のやり方やよさを学校に生かすにはどうすればよいかを考えている。
- 地域連携教員であっても「分からないことは、分からない」と伝えることで、教えてもらいながらよりよい関係づくりにつながっている。
- 計画は早めに伝えることで相手に時間的な負担をかけないようにしている。
- 連携を始めるときには、「一緒に児童生徒を育ててもらいたい。」ということをお互いによく伝えると同時に、「やってください」ではなく「お願いします」という姿勢で臨んでいる。
- 相手の立場を尊重し、できるだけ相手の話を先に聞くことによって、相手の「できること」「できないこと」を初めに把握しておくようにしている。
- 相手側の事業へボランティアとして参加する時でも、児童生徒の教育活動の一環として「参加させていただいている」という姿勢を忘れないように心がけている。
- 自分で何とかするのではなく、つながれる人・頼れる人を作る。(気の合う同僚)
- 地域連携教員が全て行うのではなく、活動の計画は実際に関わる学年(係)が行う。地域連携教員は、あくまでもつなぎの役割で、学年(係)と連携先の関係づくりを支援する。
- 連携に関する依頼があったときは、「地域のコーディネーターに相談する」ことも地域連携教員の仕事と考えている。ただし、その後の打合せに関しては、初期段階は必要に応じて同席するようになっている。
- 地域の教育力を育てるためにも、学校に関わり過ぎないようにする必要もある。
- 地域行事への参加などの場合は、学校は参加者を募り、当日の指導は地域に任せ、職員は見守る程度にしている。
- 児童生徒向けの事前指導を丁寧に行っている。
 - (・タイムスケジュール・活動内容・挨拶の徹底など)
- 事後には、お礼だけでなく、児童生徒の様子やねらいの達成度などを伝えるようにしている。
 - 「誰かを呼べばそれでよし」ではなく、連携することによって「児童生徒に何を」という「ねらい」を忘れず、また相手とも共有することが必要。
 - 相手にも学校にも得意な分野と苦手な分野があるので、お互いに補い合っていていこうというスタンスが大切。
 - 例え相手からの依頼に協力しているのだとしても、「こちらも学びの機会を得ているのだから、感謝している」という姿勢は崩さない。(間違っても「協力してあげている」という気持ちは

持たないようにし、無理に連携はしない。)

- 正直にこちらの弱みを伝えることによって、相手からの自主的・自発的な支援を得ることができる。
- しっかりと打合せをする。もちろん相談にももの。中途半端な状態でのスタートは、後でつまづくことが多い。
- 声をかけるだけでも、一緒に協力してくれる仲間はたくさんいる。逆に、形式にこだわって、正式な文書などで依頼してしまうと相手も責任を感じてかきこまってしまう。頼む相手や場合によって、その時々で判断する必要がある。
- 連携先が決まれば、後は全て学年(係)に任せることが理想であるが、新規の連携であれば初期の丁寧な対応は必要である。
- 児童生徒の心の準備が十分にできていると、当日の活動に余裕が生まれて交流が深まり、充実した活動になる。
- 次回につながる「関係づくり」と「ふりかえり」を忘れずに。

■児童生徒に関すること

- 地域連携教員となって活動をして「地域・保護者・生徒・同僚とのつながり」が増え、結果、それに伴って活動も増えてきたため、今までできなかったような経験を生徒に提供することができた。
- ボランティア関係の研修に参加した児童生徒が、研修後にボランティアに関心をもつようになってきている。今後さらに推奨したい。
- 高校生は地域との関係がブツリと切れてしまう、もしくは細くなってしまう時期である。各種活動は基本的に希望者を募り取り組んでいるが、活動に参加している高校生を見ると、こちらが思っている以上に自立していて、積極的に関わることもできる。他者との関わりもうまくできるし、苦手な子でもきっかけさえ与えればできる。
 - 地域について知る、地域の人とふれあうことで地域への愛着や誇りを持つことにつながる。
 - 従来の学校生活だけでは目立たないまま終わってしまうような児童生徒にスポットライトを当てることができる。また、ボランティア活動はいろいろな人と関わる活動を通して情操面での教育上の効果が大きい。
 - 地域連携活動をすることで、児童生徒のコミュニケーション力は間違いなく向上する。これは、先を考えれば、将来、一市民として地域で生活していくうえで必要不可欠なものだと思う。
 - 高校生は、地域とのつながりを切れ目なく持つことで、もっともっと地域で活躍することができるし、その後も活躍し続けることができる。

■職員に関すること

- 地域連携に対して、ほとんどの職員がやっていることには肯定的であるが、自分から積極的にやることに対しては、まだ抵抗を感じている部分もある。
- 地域連携に関して、興味があったり必要性を感じていたりする先生は多い。しかし、実際にはどうすればよいのかわからず、一步を踏み出せないでいる人も多いのではないかと。今回、地域連携教員が設置されたことにより、学校がそのような先生をサポートする体制が整いつつある。
- 地域連携に関して、今までは個人でやっていた先生が多いと思う。これを学校の取組として整理し、広げるために、地域連携教員が設置されたことが大きいと思う。教師も人間であるから「得手」「不得手」がある。これを学校として誰もが扱いやすくカスタマイズしていくことが地域連携教員に求められるのかもしれない。
- ある先生がやりたいと思っていながらもなかなか実現に至らなかった連携が、地域連携教員が設置されたおかげで、こちらが一声かけてコーディネートすることによって実現した。
 - 「みなさんもやってください。」ではなく、「楽しくやっている姿」や「やったことによる成果」を発表・掲示などすることによって啓発し、じわじわとよさを伝えたい。
 - 職員の地域連携への意識の壁を取り除いていくことが大切。
 - 前向きに一步踏み出す気持ちが、連携活動の実現につながる。

■地域連携教員として雑感

- 同校種の地域連携教員に呼びかけ、ネットワーク作りを目指して情報交換会を企画した。
- 同地区高校の地域連携教員とメールでグルーピングし、情報提供・交換等をしている。各種会議や研修なども「予定を合わせて参加しよう。」などの声かけもしている。
- 地域連携教員として校務分掌に位置付けられたことによって、「何かしなければ」「何かやろう」という自覚や責任感のような意識が芽生えた。(これまでは漠然と「やれるようであれば何かやろう」という感じだった。)
- 高校は、これまで「県立だから地域(市町の施設)との連携は関係ない」という感覚があったが、地域連携教員が設置されたことで、改めて「高校も地域の学校である」という意識が強くなった。
- これまでも学社連携等、意識はされてきたが説得力が弱い感じがしていた。地域連携教員が設置されたことにより、地域と連携した活動をする事の重要性について伝えやすくなった。
- 役割分担を決めることは大切であるが、明確に決めてしまうこと、かえって不都合や余計な負担につながってしまうと感じている。
- 職員の負担は思ったほど大きくない。継続して軌道に乗ることでさらに負担は減ると思う。
- 自分が地域連携に関する仕事が好きだから、多忙感をさほど感じずにいる。
- まだまだ理解が十分でない。やらなくてもよい、余計なものであるという認識を持っている教員もいる。
- 地域との連携を充実させることはとても大切なことであると思っているが、やり過ぎることは学校への負担になる。適度な充実とはどの程度なものなのかを考えていきたい。
- 教材研究を兼ねて、できるだけ地域へ出向き、常に「地域とつながることはできないか」「利用できる施設はないか」という目線で見ようとしている。
- 地域を「教室」「教科書」「教材」としての視点で見ようとし、また、地域にとらわれず、子どもたちにとって有意義な出会いとなる可能性を感じるものは、積極的に招聘している。
 - 社会教育主事有資格者ではない地域連携教員は、不安感がとても大きいと思うが、情報交換会をとおして、悩みを共有することで不安感を解消したり、いろいろな情報を得ることで業務の見通しを立てたりすることができると思う。
 - 外に出ることで、または何か新しいことに挑戦することで、新しいつながりが生まれ、次の新しい活動へと広がる。
 - チャンスはたくさん転がっている。いかに見つけて生かすか。地域連携教員の設置により、「見つける機会」も「生かす機会」も増えたと思う。
 - 今の職場での人間関係や児童生徒が学校にいる時間は人生の一瞬でしかない。職員も児童生徒も、一人の地域住民として人生を長い目で見ることによって、地域とつながることの大切さを感じてもらいたいと思っている。
 - いつもより少し地域に目を向けるだけでも情報は得ることができる。
 - 地域には子どもうちに出会っておくべき大人がいる。
 - 地域に対するアンテナを高くすると自然に情報が入ってくる。

■地域連携に関する事例(小学校)

- 地域住民のサークル活動団体の作品展示
- ALTによる英会話体験
 - ・地域住民対象
 - ・ALTはボランティアとして活動
- 公民館と連携した家庭教育学級の開催
- 地域の祭りへの参加
- 高齢者福祉施設との交流
- 地元県立高等学校との交流イベント
- 学校支援ボランティアへの積極的な依頼
- 地域住民による清掃ボランティア
 - まずは地域の大人をどんどん学校に迎え入れ、地域との関わりをたくさんもつことから。

■地域連携に関する事例（中学校）

学校課題解決を目指した地域連携活動

- ・生徒指導上や学習指導上の課題を学校だけではなく「地域の課題」として
- ・学習支援 ・部活動支援 ・キャリア教育支援 など
- ・地域の大人が見てくれるだけで生徒指導上の効果大

地域の社会教育施設のイベントへの参加

- ・活動支援ボランティアとして ・企画者として

地区清掃ボランティア活動

- 小学校での経験をもとに、少しずつ自分たちの力を地域に還元していくことで、地域住民の一員であるという自覚をもてるように。

■地域連携に関する事例（高等学校）

地域連携（地域と関わる活動）を目的とする部活動の設立

YMCA と協力したボランティア同好会による活動

- ・生徒が自主的に他団体と連絡を取りながら活動の範囲を拡大

ロータリークラブと連携した活動

- ・留学生の受入 ・緑化運動 ・清掃活動 ・災害学習 ・募金活動 など

市立図書館と連携した活動

- ・生徒の作品（写真部・クリエイティブアート部・書道部）を図書館に展示
- ・近隣校と一緒にビブリオバトルの開催 ・図書館のお祭りへの参加 など

近隣小学校への協力

- ・部活の特性に応じた学習支援活動

吹奏楽部による地域イベントでの演奏活動

学校開放事業（公開講座）

- ・学校として地域に貢献する ・職員や地域住民などを講師に
- ・生徒と地域住民がともに学ぶ場 ・対象は中学生～一般まで

大学と連携した活動（大学の施設を利用した体験授業）

地域連携活動をキャリア教育の充実に生かす

- 高校生になれば、動ける範囲も飛躍的に広がり、自主的に活動の幅を広げることができ、可能性は無限大である。地域貢献から社会貢献へ。
- 生徒のよりよい進路選択につながる。

■地域連携に関する事例（特別支援学校）

学校から積極的に地域とつながる仕掛けづくり

- ・自治会の会議への参加 ・地区の行事への参加（敬老会行事への児童生徒引率）
- ・他校の高校生との交流 ・市教育委員会や地区の公民館との連携

- まずは、とにかくこちらから働きかけることが大切。もっと自分たちを知ってもらうことで、地域連携に加えて共存社会の実現を目指して。